

東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター

潮田ヒューマニティーズイニシアティブ「公募研究 A」成果報告書

研究課題（和文）： 古代インド叙事詩『マハーバーラタ』シャーラダー系写本の研究

研究課題（英文）： A Study on the Śāradā Manuscripts of the Ancient Indian Epic *Mahābhārata*

申請者名・所属先： 高橋健二（人文社会系研究科、現東洋大学文学部）

海外招聘者名：

1. 研究の目的

本研究の目的は古代インド叙事詩『マハーバーラタ』写本伝承のうち、重要伝承の一つでありながら、研究の進んでいないシャーラダー系写本の調査研究を行うことである。

2. 研究開始当初の背景

古代インド叙事詩『マハーバーラタ』(MBh) 研究の出発点は何よりも MBh のテキストそのものである。MBh はインド各地で写本の形で伝承されているが、Sukthankar et al による批判校訂版(1927-1966)は、インド各地の写本を収集・校合し、テキストの原型を復元したもので、以後の MBh 研究の底本となっている。Sukthankar et al による校訂本の特徴として、インド北西部のシャーラダー系写本をテキストの原型に近い系統として重要視することが挙げられるが、批判校訂版作成当初の資料的制約等の問題ゆえに、用いられているシャーラダー写本の数は少なく、あるいは部分によってはシャーラダー写本は全く用いられていなかった。

一方で批判校訂版完成後も、インド各地の文書館で古写本の収集は継続されているが、新たに収集された写本を用いた MBh 研究はほとんど進んでいないのが現状である。本研究ではシャーラダー写本の存在が確認されたスリナガルの SPS 美術館、および多くの MBh 関連の写本を所蔵するプネーのバンダルカル東洋学研究所において写本調査を行った。

3. 研究の方法

本研究では、インドの文書館等に赴いて写本調査を行い、その読みを既刊刊本と比較検証した。

4. 研究成果

2024 年 3 月にスリナガルの SPS 美術館ならびにプネーのバンダルカル東洋学研究所において写本調査を行った。SPS 美術館では、同美術館に許可を得た上で、同館所蔵の MBh シャーラダー写本の写真撮影ならびに既刊刊本との比較検証を行った。残念ながら同館所蔵のシャーラダー写本は比較的古期に属するとは思われるものの (2, 300 年前か)、同写本の示す読みはインド中心部に一般的に流布している流布本のそれとほぼ同じであることが判明した。またスリナガル周辺の複数の文書館所蔵の写本も確認したが、資料的価値の高い写本を発見することはできなかった。

またバンダルカル東洋学研究所についても資料的価値の高いシャーラダー写本を発見することはでき



なかったが、ここでは先行研究において全く存在が知られていなかった MBh 注釈書一点、ならびに先行研究では存在は知られているものの、その刊本がいまだに出版されていないアルジュナミシュラによる MBh 注釈書の写本について、それぞれ電子複写を取得することができた。これらの注釈書については今後研究を進めていく予定である。

本研究では当初目的としていたシャーラダー写本の研究を進める過程で、MBh のシャーラダー系統以外の写本についても調査を進めた。その研究成果は以下の通りである。

<図書 1> 紀元前後から紀元後 7, 8 世紀に、バラモンが北インドから南インドへ移住するに伴って、MBh が北インドから南インドに段階的にもたらされたという Mahadevan 説について、年代論および方法論上の問題点を指摘した。

<雑誌論文 1> MBh の 12 巻、14 巻にはユディシティラの悲しみもしくは罪を鎮めるという内容的重複が見られるが、先行研究では 12 巻の方がより古いとされてきたが、両巻の内容分析ならびにスピツァー写本に見られる MBh 最初期の巻名一覧の分析からは、現状では両巻の前後関係を決定する有力な証拠はないことを示した。

<雑誌論文 2> pp. 79-84 において、MBh 批判校訂版の編纂方針についての解説を与えた。

<学会発表 1> MBh はもともとは口頭伝承であったものが、ある時点で写本に書写され、現在に伝わっていると考えられているが、本発表では現存写本の分岐について、どのような特徴が口頭伝承によって説明されるのかを先行研究に基づいて検証を行なった。

<その他 1> MBh 写本研究の現状を概観した上で、申請研究の将来的展望およびその文献学的意義について発表を行なった。

5. 主な発表論文等

〔図書〕

1. (担当執筆) 高橋健二 「『マハーバーラタ』インド南方伝承に関する研究動向：Mahadevan 説についての覚書」梶原美恵子編『インド語インド文学拾遺 2024』東京大学インド語インド文学研究室発行 (pp. 15-30), 2024 年.

〔雑誌論文〕

1. Takahashi, Kenji "The Double Cleasening of Yudhiṣṭhira's Sorrow/Sin: A Study of the *Śāntiparvan* and the *Āśvamedhikaparvan* of the *Mahābhārata*." *Journal of Indian and Buddhist Studies* 72 (3): 973-978. 2024.

2. 高橋健二・川村悠人「カルナとアルジュナ、そして『マハーバーラタ』研究のこれから：川尻道哉『カルナとアルジュナ—『マハーバーラタ』の英雄譚を読む』書評論文『比較論理学研究』21: 65-112, 2024.

〔学会発表〕

1. 高橋健二 「『マハーバーラタ』の口頭伝承的特徴について」公開シンポジウム「『マハーバーラタ』研究の最前線—伝承の形成と物語の発展—」於京都大学, 2024 年 3 月 26 日.

〔その他〕

1. 高橋健二 「『マハーバーラタ』写本研究の最前線」HMC オープンセミナー (オンライン) 2024 年 2 月 9 日.